View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

早稲田社会科学総合研究　別冊「2018 年度 学生論文集」

今求められる高齢者とのコミュニケーション
――幸齢社会を目指して――

稲 葉　玲 美

1　はじめに

2018 年 9 月 16 日、総務省が「敬老の日」を前に発表した推計人口によると、70 歳以上の人口が総人口に占める割合が 20.7％となり、初めて 2 割を超えた事が分かった（日本経済新聞 2018 年 9 月 16 日記事）。現代の日本社会では、世界で最も高齢化が進んでいる国として、医療・介護のための財源確保や、より良い介護サービスの開発など、新たな動きが見られる。その一方で、人材不足問題や家庭内の介護問題・介護現場での犯罪などといった、高齢者の権利を奪いかねない問題が多発しており、「高齢者介護」の持つマイナスイメージが拡大し続けている。果たして、現代における「高齢者」と呼ばれる人々は、単に年齢が高い人という捉え方で良いのだろうか。誰よりも長い人生を歩んできたからこそ、どの年代よりも幸せな年齢の人としての「幸齢者」であるべきなのではないか。

私がこのような現状に興味を抱いた理由は、幼い頃に、認知症を発症した祖父母の介護をした経験があり、当時、祖父母と家族の間での意思疎通の難しさから発生する多くの問題を抱えていたからである。この経験から、高齢者介護の現場で発生する問題の多くは、高齢者とのコミュニケーション方法を考察することで、解決できるのではないかと考えている。

本論文では、高齢者の視点に立ち、老いに対する考え方を見直し、高齢者とその家族のコミュニケーションを円滑に進める方法を探っていく。高齢者の中でも特に、在宅介護を受けている被介護者とその家族間でのコミュニケーションに焦点を当てる。研究対象を上記に限定した理由は、自身の経験から、数ある介護現場の中でも、高齢者とのコミュニケーション問題が多く発生し、高齢者とその家族が最も密接に関わるのは在宅介護であると考えたからだ。なお、本論文の考察では、先天性および後天性の視聴覚障害を持つ人との

＊　放送大学教養学部 大橋理枝准教授の指導の下に作成された。

コミュニケーションは含まないものとし、「介護」と「ケア」の区別はないものとする。

第2節では、在宅介護現場における現状を追い、介護現場におけるコミュニケーション問題を明らかにする。第3節では、第2節で明らかにした問題の背景にある「エイジズム」と「自世代中心主義」の考え方から、老いを理解する事の意義を説明する。第4節では、第2節・第3節で取り上げた問題解決の手掛かりとして、ユマニチュードの概念を参考に、高齢者介護のあるべき姿を追求する。第5節では、日本の高齢者介護における問題解決に向け、有効な高齢者とのコミュニケーション方法を考察する。そして、最終節では、本論文の総括と今後の課題、及び私の考える「幸齢社会」についてまとめる。

2　超高齢社会の日本が抱える問題

2-1　在宅介護の難しさ

定年を過ぎ老後を迎え、自分自身の力だけでは生活できなくなった人は、どこで誰の力を借りて生活することを希望するのだろうか。三菱UFJリサーチ＆コンサルティングの「高齢社会に関する意識調査」（平成28年3月実施、40～80代の約3000名対象）によると、高齢期に生活したい場所に、自宅を選択した人が72.2%であった。この事から、これまで住み慣れた家・街を離れることなく、最期まで暮らしていきたいと希望する人が多いことが分かる。さらに、もし一人暮らしをすることになった場合に頼りたい人に、子ども・孫・きょうだい・親戚のいわゆる「家族」を選択した人は65.6%に及んだ。これらの調査結果から、今後の日本では在宅介護が増え、家族の負担が大きくなる事は不可避の状態であるといえる。

在宅介護における家族の感じる負担について、行っている介護行動に対する負担に感じている介護行動の割合（本論文では負担率と示す）を以下の表にまとめた。

これらの数値から、負担率が0.09から0.68というかなり幅広い値に亘ることが分かる（表1）。その中でも、行っている介護行動が6割を超えている5つの項目のうち、「日常的な見守り・一緒にいる」ことの負担率が最も高いことに着目すると、介護をする側の人にとっては、高齢者の傍に居る事そのものが苦痛となっている事が窺える。

在宅介護は病院・施設での介護に比べると、体が不自由になり、健康状態が悪化してきた高齢者に対する十分な医療・介護措置が出来ない。また、ケアをする家族は、医療・介護従事者に比べると、介護に関する知識が不十分な上、各々が日常生活を送りながら介護を行う事になる為、精神的苦痛や介護離職など、様々な困難に直面する。実際に、家族が使命感に燃え、一所懸命に介護し誠心誠意尽くす場合、家族内だけで問題を抱え込み解決できなくなることが多く考えられ、私の家族もこのような状況に陥った経験がある。

さらに、在宅介護の最も難しい点は、高齢者にとって良好な人間関係が失われてしまう

表１　在宅介護経験者対象　介護の状況と負担に感じていること（複数回答）　n ＝ 200

介護行動	行っている介護行動	負担に感じる介護行動	負担率[1]
掃除・洗濯などの家事	71%	24%	0.34
食事作り	68%	27%	0.40
外出時の付き添い	66%	27%	0.41
日常の声掛け・会話	65%	18%	0.28
日常的な見守り・一緒にいる	63%	29%	0.46
シーツ・ベッドの衛生管理	49%	13%	0.27
着替え	40%	5%	0.13
歩行補助	37%	12%	0.32
トイレの介助	33%	19%	0.58
散髪・爪切りなどのみだしなみ	33%	8%	0.24
食事の介助	32%	3%	0.09
入浴・洗髪	28%	15%	0.54
おむつ・パンツ交換の一部介助	27%	16%	0.59
おむつ・パンツ交換の全介助	25%	17%	0.68
口腔ケア・歯磨き	22%	7%	0.32

注１：負担率＝負担に感じる介護行動÷行っている介護行動
出所：廣瀬輝夫（監）『介護・看護サービスデータ集 2017−2018』（2016）掲載（株）Lifull Senior が HOME'S 介護による「要介護者の介護に関わる人を対象とした介護施設に関する意識調査」を基に作成

点である。三好（2007）は在宅介護で喪失する人間関係について次のように述べている。

> いくらいい家族に囲まれていても、家から一歩も出ないという生活をしていると、人間は元気がなくなるものなのだ。（中略）なにしろ、家族も、やってきてくれる人たちも、老人から見ればみんな自分より若くて元気な人ばかりである。となると、“世界で一番不幸なのは自分だ”という気持ちになっても不思議ではない。（中略）自分と同じように年をとっており、同じように障害を持っている人との、横の人間関係が必要なのである。（p. 160）

この事から、在宅介護には、常に家族の傍に居る事が出来るという利点と、介護者・被介護者の双方に悪影響を及ぼしてしまうという欠点があることがわかる。特に深刻な欠点が高齢者の人間関係を奪ってしまう事であり、これはすなわち、意図せぬうちに高齢者から人間らしい生活を奪い、老化に拍車をかけてしまっている事にも繋がると考えられる。

2−2　高齢者介護におけるコミュニケーションの難しさ

「良いコミュニケーション」は、介護現場のみならず、学校・職場・社会的組織内など、多くの場面で重要視されている。そんな中、介護現場でのコミュニケーションの現状はどのようなものなのであろうか。本田・ジネスト・マレコッティ（2014）によると、高齢者

とのコミュニケーションでは、聴力障害や認知症の症状により、返答が返ってきにくくなるとされている。この現象が続くと、次の言葉へのエネルギーが得られず、フィードバックをくれない人には言葉をかけなくなる。この事はごく自然の事であるとされている一方、これが高齢者とのコミュニケーションの特徴を示している。

さらに、長谷川（2010）は、高齢者との特有なコミュニケーション例として、「ダブルバインド」を挙げている。これは、返答はすることが出来ても、言語で伝えている内容と非言語で伝えている意味が食い違ってしまい、さらにその状況を避けることができないという状態に陥ったコミュニケーションである。ダブルバインドが起こる原因は、高齢者特有の対話障害や、家族間であるが故に生じてしまう不適切な距離感の会話などによるものである。

これらの現状が続くと、話してくれない相手、適切に応える事ができない相手には話さなくなり、見つめてくれない相手、見つめても返してこない相手を見つめることはしなくなる。さらに、家族間でのコミュニケーションでは、不自由が増えて昔と変わってしまった相手へのショックや、「介護が必要になった事を認めたくない」という抵抗感から、急速に家族間の溝を深めてしまう事にも繋がると考えられる。

以上の事から、高齢者とのコミュニケーションを何とかして改善していくことが、在宅介護の多くの場合に求められているといえる。そして、この問題を解決することで在宅介護の難しさが軽減されるのではないかと考える。この問題の解決には、医学的観点だけでなく、介護をする側のコミュニケーション技法を高める他、「老い」に対する意識を改善することが重要である。

3　多発する高齢者介護問題の背景

近年、高齢者介護問題の背景として取り上げられ始めている事柄に、「エイジズム」と「自世代中心主義」がある。本節では、この２つの事柄に起因するジレンマやコミュニケーション問題と、そこから共通して生まれる異文化コミュニケーションを明らかにしていく。

3-1　エイジズムの持つ二面性

KAIGO LAB に掲載されている辻（2016）の記事によると、「エイジズム」は、1969 年にアメリカの国立老化研究所の初代所長であったロバート・バトラーによって「人種差別や性差別が、皮膚の色や性別をもってその目的を達成するように、老人差別は、歳をとっているという理由で老人たちを組織的に一つの型にはめ、差別をすることである」と定義されたものである。エイジズムの持つ大きな問題は、早急に解決するべき差別であるという

考えの一方で、高齢者を守る為の大切な指標であるという考えも挙がっている事である。エイジズムに対する考えの二面性と、そこから生まれる問題について、辻（2016）は次のように述べている。

> 人種差別や性差別はある意味でわかりやすく、否定しやすいものです。しかしエイジズムはそうもいきません。高齢者に対するネガティブなイメージは、ある意味、高齢者を優遇するうえで大切な指標になっている部分もあるからです。（中略）高齢者に対する医療費負担の軽減や、介護保険制度についても、高齢者が若者とは違う、特別な存在であるという前提で成り立っている制度です。民間における高齢者割引なども、高齢者は「守られるべきである」という考え方の上で成り立っています。

この事から、考えの二面性があるエイジズムにより、高齢者に対するマイナスイメージと、高齢者に対する優遇の双方が成り立っている事が分かる。これは、高齢者介護に潜むジレンマとして捉える事が出来る。

このジレンマを解消するためにはどうすれば良いのだろうか。その答えは、「エイジズムの二面性を正しく理解する事」に尽きるのではないかと思う。一方の捉え方を重視するのではなく、双方の捉え方を理解する事で、高齢者を過度に差別してしまう事態も、高齢者への平等を意識しすぎる故、多様性や権利を無視してしまう事態も、未然に防ぐ事が出来そうである。そして、この双方への理解が、老いへの理解に繋がるであろう。

3-2　自世代中心主義

現状では、老いという現象はどのようなものとして捉えられているのだろうか。複数の辞典で「老い・老化・加齢」などの言葉を調査してみると、「能力の低下」として記述されている事が多い（『明鏡国語辞典』『広辞苑』『岩波国語辞典』など）。この事について、三好（2007）は「老いは常に若い世代との比較で語られるのである。（中略）これが『自世代中心主義』でなくてなんだろうか。」（pp. 247-248）と述べており、他の世代と老人世代の関わり方の問題を主張している。

ここで述べられている「自世代中心主義」は、「自民族中心主義」や「自文化中心主義」などと同列の概念である。三好（2007）の指摘通り、「老い」は、高齢者以外の世代の捉え方が前提になり、成り立っている。非高齢者たちが、自分たちの物事の捉え方と高齢者のそれとが異なる可能性があることを考えないまま高齢者に接することが、高齢者とのコミュニケーションを難しくしてしまっているといえる。この問題を解決するためには、介護をする世代にとって「当たり前」だと思うことが、高齢者にとっては「当たり前」ではないということ、そして、高齢者が「当たり前」だと思っていることを、介護者は「当たり前」だと思えていないということにも気づく必要があるだろう。

以上のエイジズム・自世代中心主義の２点から、高齢者と介護者の間のコミュニケーシ

ョンは、高齢者と介護者のそれぞれが持つ「当たり前」の違いから、正に異文化コミュニケーションの様相を呈するものであるといえる。ここで生じている異文化摩擦の解消には、双方の考え方を理解し、老いの捉え方を改め、高齢者に歩み寄る姿勢を持つ事が必要不可欠である。

3-3 「老いる」ということ

「老い」とは、本当にマイナスイメージでしか捉えることが出来ないのであろうか。三好（2007）が紹介している哲学者の土屋賢二は「若さを失う」という表現の代わりに、「若さから解放される」「若さから立ち直る」「老いを獲得する」といった表現を提案している。また、竹中（2006）によると、老いは衰えという身体性と、その状況下をいかに生きるかという精神性の両面から存在の意味を問いかけるものであり、高齢者に必要なのは老いの否定ではなく、それに向き合うことであるとされている。さらに、長谷川（2010）の紹介する、前衛美術家であり作家の赤瀬川原平による老化に対する捉え方として「老人力」というものがある。これは、老いによって生じた変化を高齢者自らがポジティブに意味づけし、「老人力がついた」と前向きに受け入れる試みである。この力は、世の中や会社には役立たないが、人生には役立つという考えが展開されている。

これらの事から、老いの現象を、ただ死が近付く現象として捉えるのではなく、老いそのものを前向きに捉え、「生きている間は人生を楽しみ、死ぬときは潔く死ぬ」という生き方を確立する事こそが、老いを理解することに繋がると考える。

4　ユマニチュードの実践による問題解決

4-1　ユマニチュードとは

フランスから始まり、欧州及び北米に広がった革新的なケア方法に、Humanitude（ユマニチュード）という概念がある。これは1995年に体育学の教育者であったジネストとマレスコッティが定義づけ、日本では2012年から導入された。「ユマニチュード」という言葉は、かつて植民地に住んでいた黒人が自らの黒人らしさを取り戻そうとして行った活動「ネグリチュード」に由来している。

本田・ジネスト・マレスコッティ（2014）によると、ユマニチュードの状態とは、「その人の“人間らしさ”を尊重し続ける状況」（p. 5）であると定義され、人とは何かを追求することから始め、「見る・話す・触れる・立つ」の4つの方向から、高齢者のケアを改める方法を提案している。

4-2 「見る・話す・触れる・立つ」

「見る」という行為には、様々な感情や他者との関係のあり方を伝える働きがある。これは、言語や世代問わず共通している働きであると考えられるが、言葉による意思疎通が難しくなる高齢者にとって、極めて重要な行為であるといえる。特に、ユマニチュードにおける「見る」ことは、「あなたはここにいる」という、相手の存在を認めるメッセージであると捉えられている。

ユマニチュードにおける「話す」という行為の中では、「オートフィードバック」という技法が扱われている。ケアには行っている行為が必ず存在する。このケアを実況したり、確かに相手が存在することを表す言葉を自分から発したりすることにより、相手からの応答がなくても次の会話へのエネルギーを自分で作り出す技法がオートフィードバックである。

「触れる」という行為について、人間の接触は、視覚・聴覚等の感覚よりもずっと早く発達・形成されている為、桝本（2000）は「人の体に触れることは、最も人間的なコミュニケーションの方法である。」（p. 87）と述べている。ユマニチュードにおいても、親を始めとする身近な人から触れられることの少なくなった高齢者への「触れる」という行為は意識的に行うべきであるとされている。

最後に、「立つ」という行為は、「社会における自己」を認識する為の行為であると捉えられている。「立つ」ことにより、周りの人と同じ人間である意識や、空間認知が生まれ、ポジティブな感情を持ちやすくなるとされている。富家（2017）によると、日本は寝たきり老人の比率が世界各国と比べてダントツに高く、現在約 200 万人であるとされ、このままいくと 2025 年には 300 万人に達する事が予想されている。その中には、単に体が不自由になったからではなく、認知症による異常行動を防ぐため、ベッドに拘束され、意図的に「寝たきりにさせられている」高齢者も含まれている。その一方で、欧米には寝たきり老人が少なく、「生きている間は人生を楽しみ、死ぬときは潔く死ぬ」という死生観が多くの国民に理解されている（宮本・宮本，2015）。この現状から、高齢者の寝たきり状態を解消し、「立つ」という行為から人間らしさを尊重することが極めて重要である事が分かる。

以上の 4 つの技法を併用することで、高齢者に安心感を与え、人間らしく、心地の良い会話を成立させることが出来るのではないかと考える。

4-3 高齢者にとっての「心地良い会話」とは何か

高齢者にとっての「心地の良い会話」とはどのようなものなのであろうか。「高齢者の視点に立ち行う会話」、「思いやりのある会話」のように、漠然と想像することは可能でも、具体的な方法を見出し、実践する事は困難だろう。本項では、長谷川（2010）が提唱

している「解決志向ケア」に含まれる複数のコミュニケーション技法の中の「呼び名を変えて始める会話」・「速度を落とした会話」・「ユーモアのある会話」の3つの視点と、前項で述べたユマニチュードの概念から「心地の良い会話」を考察していく。

はじめに、「呼び名を変えて始める会話」についてだが、長谷川（2010）の研究によると、介護現場での呼び名を、苗字から下の名前やあだ名・「お父さん」「先生」「団長」といった親密なものに変えたほうが、介護者―高齢者間のコミュニケーションは良好になることが分かった。コミュニケーションの中でも特に、表情が大きく変化し、会話中の笑顔が増え、表情が明るくなったことが確認されたという。この事について、長谷川（2010）は次のように述べている。

> 呼び名は呼ぶ人と呼ばれる人の間の関係性を表します。（中略）逆に言うと、呼び名を変えるだけで関係性まで変わってしまうことも多々あるように思います。（中略）場面や状況、関係性など、さまざまなことをたった一語で表すことのできる呼び名。だからこそ呼び慣れている、あるいは呼ばれ慣れている呼び名を変えることには、非常に大きなインパクトが伴います。コミュニケーションを変化させて問題を解決しようとするとき、これを使わない手はありません。（pp. 31−32）

この事から、呼び名を変えることで高齢者の個性を尊重したコミュニケーションが実現される可能性があることがわかる。しかし、ただ闇雲に呼び名を変えることは介護におけるコミュニケーションでは不適切な場合もあり得る。それは、高齢者は呼び名を変えられることで子ども扱いをされていると感じる可能性があるからだ。その為、高齢者の尊厳を守ることを最優先し、呼び名を工夫する事は、あくまでコミュニケーションを変化させるための手法の一つであるという前提を認識する必要がある。

次に「速度を落とした会話」についてだが、長谷川（2010）は速度を落とし、口頭だけではなく、文章に書くコミュニケーション方法を提案している。要介護の高齢者には、口頭で相手と同じ速度で返答することが困難な人がいる。その一方で、高齢者は物事をじっくり味わい、長年の知識・経験を活かした考えを生み出す能力には長けている。この特徴を活かし、交換日記や和歌などを通じ、じっくりと時間をかけたコミュニケーションを作り出す事が有効であるといえる。この事について、長谷川（2010）は「ポイントは、対話の速度を緩めながら、対話を途切れさせずに保ち続けることなのです。」（p. 66）と主張しており、この姿勢こそが、要介護の高齢者を抱える家族に求められているものなのではないかと考える。

最後に「ユーモアのある会話」についてだが、長谷川（2010）は解決志向ケア全体においても、「ユーモア」を重要視している。この事は、高齢者にとっても、その家族にとっても心地の良い会話を作り出す上では非常に有効であるといえる。例えば、祖父が夜中に冷蔵庫の中にある食料を漁っていた時、その家族はどのように捉え、どんな言葉をかける

べきであろうか。長谷川（2010）は、この事例に対し「おじいちゃんが、昨日冷蔵庫の中に入ろうとしていたよ！」（p. 124）という会話を紹介していた。確かに、この時の冷蔵庫を漁る行動は、いわゆる問題行動であると捉えることも出来るが、「漁っていた」ではなく「入ろうとした」と捉え、家族に共有する事で、高齢者自身もその家族も緊張が和らぐとされている。このようなユーモア溢れる会話が家族間で広がっていく事で、高齢者にとって非常に心地の良い会話が成り立っていくのではないかと考える。

ジネスト・マレスコッティ・ペリシエ（2014）によると、世代の異なる者同士の方が、同年齢の者同士よりも、非言語的合図（とりわけ顔の表情）を読み取るのが困難である事が確認されている。これはすなわち、高齢者とのコミュニケーションの中で、相手のスタイルに合わせて調節し発話する為には、普段の同世代間でのコミュニケーション時とは異なる会話方法を身につける必要があるということである。この事から、家族内での高齢者とのコミュニケーション時には、常に顔の表情を始めとする、非言語的合図に注意し、相手の受け止め方を予測しながらコミュニケーションを調節していく必要があるのではないかと考える。

5　考察――高齢者との有効なコミュニケーション方法――

本論文で明らかにした、エイジズムや自世代中心主義に起因する日本の高齢者介護のコミュニケーションに関わる問題を解決するためにはどのような行動を起こすべきなのか。その答えとして、単に話題のケア方法を学び、エイジズムや自世代中心主義を改め、欧米と同様の死生観を持つ事を挙げるだけでは不適切である。その理由は、介護をする側の人にとっての「当たり前」は介護を必要とする高齢者の「当たり前」でなく、これに基づく異文化摩擦は、高齢者介護に対する思考の、より深いところまで改善しない限り解消しないからである。

これらの事を踏まえると、日本の高齢者介護にとって必須なのは、自身の老いについて考え、介護の本質を捉えた上でのコミュニケーションを作り出す事なのではないか。自身の老いについて考える事の重要性は、ユマニチュードを創出したジネストとマレスコッティ、理学療法士の三好や内科医の本田など、複数の専門家が述べている。介護は、子育てとは異なり、自分がまだ経験した事のない年齢の人を相手にするものである為、自分の経験が活かせないという難点を持つ。この難点から、自世代を中心とした「当たり前」の考え方が生まれ、エイジズムなどの問題にも繋がってしまう。この難点を解消するためには、自身が老いを迎えた際、自身とどのように向き合えば老いを受け入れられるか、どのように老いを受け入れれば楽しい人生を送ることが出来るのかという事を想像することが大切である。この事が、エイジズムに潜む高齢者介護のジレンマや、高齢者介護の持つマ

イナスイメージを解消することにも繋がるといえる。

また、私の考える介護の本質は、その人の健康と精神的な安定の回復と維持に不可欠の要素である、「最大限の幸福感」をもたらすことである。子育てのように、相手の成長を目指したり、延命治療のように、相手の生命の限界を超えたりするのではなく、今ある幸せを最優先し続けることが重要なのではないか。そして、この本質を捉えると同時にユマニチュードの考え方を身につけることが出来れば、高齢者に掛ける言葉が変わり、高齢者一人一人の目線に立った有効なコミュニケーションに変わっていくのではないかと思う。

6　幸齢社会を目指して――今後の課題――

6-1　まとめ

最後に、私の考える「幸齢社会」と、そこに潜む今後の課題について述べようと思う。「高齢者は幸齢者であるべき」という私の考えは、祖父母の介護と向き合ったり、エイジズムや自世代中心主義といった、一種の偏見に気付いたりした事により生まれた考えである。この考えが日本中に広がれば、超高齢社会の日本として、世界に先駆けた有効な高齢者とのコミュニケーションが確立できるだろう。

有効なコミュニケーションを確立させるためには、まず「老いに対する考えを見直す大切さ」に気が付く機会を持つ事が重要である。高齢者介護の問題は、家族や知人など、身近な人が高齢者となり、介護を必要としてから初めて、実感し真剣に考え始めることが多いように思う。しかしながら、急速に高齢化が進んでいる日本では、国民全員が早い段階から老いを理解し、介護問題に直面する準備をする必要があるだろう。その為には、学校教育の中で老いを知る機会を設けるべきなのではないかと考えている。学校教育では、社会人になる為の教養を身につけ、様々な経験を積んでいく。その中に、超高齢社会で生きていくための心構えを学ぶ機会を設けることは、今後必要不可欠になるのではないか。

そして、その上で必要になるのが、高齢者の視点に立った異文化コミュニケーションの能力である。佐々木（2000）によると、「自己と相手のコミュニケーション上の役割を客観的に理解し、相手の立場で物事を考えられる寛容性と柔軟性をもって会話を管理できる人が、高い異文化間コミュニケーション能力を有する人」（p. 44）であるとされている。この能力を兼ね備える事が出来れば、高齢者に敬意を表し、お互いが心地の良く感じる会話をつくり上げる事が出来るだろう。

6-2　今後の課題

本論文では扱えなかった課題も多くある。そのひとつに、介護をする側の人（家族・医療介護従事者を含める）に対するケア不足が挙げられる。近年の日本では、在宅介護での

虐待事件や介護・医療施設での殺人事件などが後を絶たない。この事件の原因には、介護をする側の人に過度な肉体的・精神的負担がかかったり、介護に生活が縛られることにより人権が侵害されたりする事が挙げられる。理想的な幸齢社会の対象は、全ての年齢の人々であるべきだ。その理由は、人は誰しもが年齢を重ね、老いていくからである。「誰もが幸せに齢を重ねることの出来る社会」としての幸齢社会を目指すには、上記のような介護をする側の人のためのケア課題も解決していく必要があるだろう。

その他にも、外国人介護従事者が増え介護に国境がなくなりつつある今、文化的・言語的課題や、AI・ロボットの参入による介護現場での弊害も大きな課題として挙げられる。引き続き、超高齢社会の日本国民の一員として上記の課題を考察し続けていきたい。

引用文献

［1］北原保雄（編）（2002）『明鏡国語辞典』大修館書店
［2］佐々木由美（2000）「会話スタイル」西田ひろ子（編）『異文化間コミュニケーション入門』第1章　第2節　創元社
［3］ジネスト，イヴ・マレスコッティ，ロゼット・ペリシエ，ジェローム（著）　本田美和子（監）辻谷真一郎（訳）（2014）『Humanitude ユマニチュード』トライアリスト東京
［4］新村出（編）（2018）『広辞苑　第7版』岩波書店
［5］竹中星郎（2006）「老年期をいかに生きるか―喪失体験と再生―」木村利人・折茂肇（監修・編著）『クリエイティブ・エイジング―生の充実・いのちの終わり―』第1部　ライフ・サイエンス
［6］辻正太（2016）「超高齢社会を取り巻くエイジズム（年齢差別）をなくすことが要介護者を減らすことにつながる」『KAIGO LAB』http://kaigolab.com/column/15417（アクセス 2018/11/05）
［7］富家孝（2017）「なぜ日本は『寝たきり老人』大国？安らかな自然死を許さない、過剰な延命治療が蔓延」『Business Journal』https://biz-journal.jp/2017/02/post_17905.html（アクセス 2018/11/09）
［8］西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（1987）『岩波国語辞典　第4版』岩波書店
［9］日本経済新聞『70歳以上、初の2割超え　働く高齢者も最多』https://www.nikkei.com/article/DGXMZO35415440U8A910C1MM8000/（アクセス 2018/11/18）
［10］長谷川啓三（2010）『解決志向介護コミュニケーション―短期療法で家族を変える』誠信書房
［11］廣瀬輝夫（監）（2016）『介護・看護サービスデータ集 2017−2018』三冬社
［12］本田美和子・ジネスト，イヴ・マレスコッティ，ロゼット（2014）『ユマニチュード入門』医学書院
［13］桝本智子（2000）「非言語」西田ひろ子（編）『異文化間コミュニケーション入門』第2章　創元社
［14］三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（2016）「平成27年度　少子高齢社会等調査検討事業報告書」https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/001_2.pdf（アクセス 2018/11/05）
［15］宮本顕二・宮本礼子（2015）『欧米に寝たきり老人はいない―自分で決める人生最後の医療』中央公論新社
［16］三好春樹（2007）『老人介護　じいさん・ばあさんの愛しかた』新潮文庫